

第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館の提案

蔵屋美香

□. 企画書

コンセプト概要

かつてない規模の東北大震災を経験した日本は、国際的な美術の祭典の場で、世界に向けてどのようなメッセージを発するべきでしょうか。第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレにおいて、日本館の作品は、いかなる形の表現を取るのであれ、この問い合わせ回避することはできません。

今回提案するプランでは、アーティスト、田中功起の映像作品とインスタレーションにより、「他者の経験を自分のものとして引き受けることはいかにして可能か」というテーマに取り組みます。

アーティストである田中も提案者である私も、停電や放射線被害など、部分的には震災を経験しています。しかし、近親者や家財の一切を失った人々や、原発事故により生活圏から離れざるを得ない人々の壮絶な経験については、想像力を駆使する、忘却しない、程度のことしか、アクセスの方法を見つけられずにいます。

しかし、このような中で、さまざまな大小、濃淡で震災を経験した者同士が、あるいは遠く離れた国や地域に住む人々が——ビエンナーレを訪れる観客の大半がそうでしょう——、または時間を隔てた後代の人々が——今回の震災に限らず、戦争をはじめ、厄災はこれから幾度でも起こります——何らかのかたちで経験を共有するための可能性を探ることはできないでしょうか。

今回のプランは、こうした経験共有のためのプラットフォームとなることを願って作られたものです。概要は下記の通りです。

- (1) 震災のさまざまな側面に直接的、間接的に言及するいくつかの「練習問題 (exercise)」を設定します。
- (2) これらの「練習問題」を複数の人々から成るグループに与え、協働作業による取り組みの過程を、15 本から 20 本程度の映像作品に仕上げます。
- (3) 加えてこれらの映像を、指定された素材のみを用いて建築関係者のグループがデザインした個々の作品用のブースに展示し、会場を構成します。

プラン詳細

田中功起は、映像およびインスタレーションを主な媒体として活動しています。その作品においては、初期から一貫して事物が大きな役割を果たしてきました。ある時はバケツや脚立などが自分の意志を持って運動しているかに見えるしきけが施され、またある時は、未知の使用法を求めて人間が事物に延々と働きかける、というテーマが扱われました。

しかし、近年田中は、事物中心から、事物を介した人ととの関わりへ、さらには事物を介することなく人々の行為そのものに焦点を当てた作品へと移行しています。

たとえば《Relocate the Public Library in Taipei by borrowing one love story book at a time. Leave the book in the Taipei Fine Arts Museum》（台北市立美術館、2009年）で、田中は、人々に図書館からラブストーリーの本だけを借り出し、美術館の一角に設置した書棚に置くよう依頼しました。つまりそこには、人々の協働作業により、ラブストーリーばかりを集めた図書館が一時的に出現したのです。

また《a haircut by 9 hairdressers at once (second attempt)》（Yerba Buena Center for the Arts、2010年）では、9人の美容師が話し合って一人の女性の要望を解釈し、その髪をカットします。同じく《A Piano Played by Five Pianists at Once (First Attempt)》（ルーム・ギャラリー、カリフォルニア大学アーヴァイン校、2012年）では、専門分野を異なる5人のピアニストが、1台のピアノに並んで座り、曲を作るよう依頼を受けます。いずれも独特の角度から造形という問題を扱うこれらの映像作品には、手探りで着地点を見つけようとする人々が、話し合い、合意し、あるいは戸惑い、すれ違う過程が丁寧に捉えられています。

このように、特定のグループにある「練習問題」を与え、その過程を映像にするという手法は、現在田中が最も熱心に取り組んでいるものです。今回はこの手法を用い、震災のさまざまな側面に言及する下記のような「練習問題」に共同で取り組むよう、異なる年齢や職業から成る人々に依頼します。

■ 身のまわりの環境を再解釈する

- ・ 手近なものを使い、街の中に昼寝の場所を作る（任意の人々）。
- ・ 見える限りの範囲で一番高い場所を探し、登る（任意の人々）。
- ・ 自動販売機の中身をすべて購入し、道行く人々に配る（大通り沿いに住む人々）
- ・ できるだけたくさんの懐中電灯をそれぞれが手に持ち、大勢で夜道を歩

く（子どもたち）。

■ インフラストラクチャーを欠いた状況に身を置く

- ・ ある建物の明かりを特定の時間すべて消す（建物の住人たち）。
- ・ 高層ビルの非常階段を、できる限り音を立てず大勢で下りる（オフィスワーカーたち）。
- ・ もしこの職業に就かなかつたら何をしていたと思うか話し合う（電気関係の仕事に従事する人々）。
- ・ ろうそくが溶けてなくなるまで会話を続ける（任意の人々）。
- ・ 自転車の発電機でお湯を沸かす（任意の人々）。
- ・ コピー機やスキャナーを使わず手書きで1冊の本を複写する（事務職の人々）。

■ 見えないものを可視化する

- ・ ペットボトルの水で最寄りの原子力発電所からの距離を地面に書く（国内外の異なる場所にいる複数の人々）
- ・ 花粉症の人ばかりで徐々に山に近づいて行く（花粉症の人々）。

■ 造形する

- ・ 壊れた複数の陶器の破片から一つの陶器を復元する（修復家たち）。
- ・ 本を焼いて火を起こし、フライパンを暖めて調理を行う（料理人と文筆家）。
- ・ 複数の詩人によって一つの詩を書き上げる（詩人たち）。

加えてこれらの映像は、先に触れた通り、建築関係者のグループに与えられた次のような「練習問題」に従いデザインされたブースに設置されます。

- ・ 指定された素材（アルミシート、毛布、木材）のみを使って、個々の映像が持つ「練習問題」の内容や参加者にふさわしい専用のブースをデザインする（建築家、工務店勤務者や土木関係者）。

ギャラリー全体は、仮設的な素材で作られたこれらのブースによってゆるやかに区切られ、観客はその間を自由に行き来しながら映像を鑑賞します。なお、2階ギャラリーの展示全体の、いわばメイキングとなるレベルに位置するこの建築関係者の映像のみは、1階ピロティ部分に残材と共に展示し、2階ギャラリー内の開口部からも覗ける作りとします。このことにより、ピロティと2階ギャ

ラリーとを有機的につなぐことが可能となります。

さて、これらの「練習問題」が震災に言及する直截性の度合いはさまざまです。いずれも私たちの日常生活に根差したもので、あるいは今回のような大きな経験に対するには、あまりにさり気ないものに思われるかも知れません。しかし、厄災の経験を日常の経験へと接続することは、改めて日々を生きて行くために必要な作業です。また日常の経験への接続こそが、直接に厄災を経験しなかった数多くの人々が、他者の経験を自分のものとして引き受ける可能性を開くための道筋となると考えます。

震災から2年余りの時期に開催される第55回ヴェネチア・ビエンナーレでは、1年を経た今よりも、さらに「他者の経験を分かち持つ」ことで、この出来事を忘却しないための方策を講じることが重要になるはずです。このプランが、そのための一つの場となれば幸いです。

予算概算

作品制作費（機材費、協力謝金等）：200万

関係者旅費：250万

作品輸送費（保険料込）：250万

会場施工費（電気関係含む）：600万

展示機器購入およびレンタル費（モニター、プロジェクター、DVDプレイヤー等）：350万

現地管理運営費（現地コーディネーター謝金、会場運営費他）：1000万

印刷費（カタログ作成費、翻訳料等）：400万

広報費：300万

その他諸謝金：100万

合計 3,450万

二. 応募者および出展作家略歴

応募者：蔵屋美香（くらや・みか）

略歴

- 1966 千葉県生まれ
1988 女子美術大学芸術学部絵画科（洋画専攻）卒業
1992 千葉大学大学院修了（教育学修士）
1993 東京国立近代美術館研究官
2008 東京国立近代美術館美術課長
現在に至る

主な企画展覧会

- 2001 「美術館を読み解く—表慶館と現代の美術」（東京国立博物館 表慶館）
2003 「旅—『ここではないどこか』を生きるための 10 のレッスン」（東京国立近代美術館）
2007 「わたしいままいしたわ 現代美術に見る自己と他者」（同）
2009 「ヴィデオを待ちながら—映像、60 年代から今日へ」（同）
2009 「所蔵作品を中心とした小企画 寝るひと・立つひと・もたれるひと」（同）
2010 「所蔵作品を中心とした小企画 いみありげなしめ」（同）
2011 「所蔵作品を中心とした小企画 路上」（同）
2011 - 2012 「ぬぐ絵画—日本のヌード 1880-1945」（同）

出展作家：田中功起（たなか・こおき）

略歴

- 1975 栃木県生まれ
2000 東京造形大学造形学部美術科絵画専攻卒業
2000 - 2003 武蔵野美術大学出版編集室（現出版局）に勤務
2004 アジアン・カルチュラル・カウンシルの助成によりニューヨークに滞在
2005 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
2005 - 2006 ポーラ美術振興財団の助成およびフランス政府給費留学生としてパリに滞在

2009 - 2012 文化庁新進芸術家海外留学制度にてロサンゼルスに滞在
現在に至る

主な個展

- 「特別展示 田中功起：買物袋、ビール、鳩にキャビアほか」（群馬県立近代美術館、2004年）
「立てることと倒すこと」（モジュール、パレ・ド・トーキョー、パリ、2007年）
「第1回田中功起ショード『今までのこと、さいきんのこと、これからのこと』」（上野の森美術館ギャラリー、2007年）
「たとえばここ最近の作品をすこし違ったかたちでみせること」（群馬県立近代美術館、2008 - 2009年）
「Random Hours, Several Locations」（YYZ Artist's Outlet、トロント、2010年）
「Nothing Related, but Something could be Associated.」Yerba Buena Center for the Arts、サンフランシスコ、2010年）
「雪玉と石のあいだにある場所で」（青山目黒、東京、2011年）
「A Piano Played by Five Pianists at Once (First Attempt)」（ルーム・ギャラリー、カリフォルニア大学アーヴィング校、2012年）

主なグループ展

- 「セゾンアートプログラム・アートイング東京 2001 生きられた空間・時間・身体」（旧新宿区立牛込原町小学校、2001年）
「六本木クロッシング：日本美術の新しい展望 2004」（森美術館、2004年）
「Pawel Althamer: In the Centre Pompidou」（Espace315、ポンピドー・センター、パリ、2006年）
「国立新美術館開館記念展 20世紀美術探検 アーティストたちの三つの冒険物語」（国立新美術館、2007年）
「ボルタンスキープレゼンツ La Chaine 一日仏現代美術交流展」（BankArt Studio NYK、2007年）
「Spectacle and Situation」（パウル・クレー・センター、ベルン、2007年）
「日本の新進作家 vol.6 スタイル/アライブ」（東京都写真美術館、2007-08年）
「夏への扉 マイクロポップの時代」（水戸芸術館、2008年）
「笑い展：現代アートにみるおかしみの事情」（森美術館、2008年）
「Whose exhibition is this?」（台北市立美術館、2009年）
「Making is Thinking」（Witte de With, Center for Contemporary Art、ロッ

テルダム、2011年)

「Trading Futures」(台北現代美術センター、2012年)

「Made in L.A.」(ハマー美術館、ロサンゼルス、2012年)

主なビエンナーレ、トリエンナーレ等参加

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(2003年、2006年)

「2006 台北ビエンナーレ：Dirty Yoga」(2006年)

「第7回光州ビエンナーレ」(2008年)

「釜山ビエンナーレ 2008 : Sea Art Festival, Voyage Without Boundaries」

(2008年)

「ヨコハマトリエンナーレ 2011 “OUR MAGIC HOUR” 世界はどこまで知ることができるか？」(横浜市美術館他、2011年)

主なスクリーニング

「Premieres」(ニューヨーク近代美術館、2005年)

「Marking Time」(グッティ・センター、ロサンゼルス、2005年)

「Out of the Ordinary: New Video from Japan」(ロサンゼルス現代美術館、2007年)

「Tuesday Evenings at the Modern: Koki Tanaka」(フォートワース近代美術館、2011年)

主な出版物

『特別展示 田中功起：買物袋、ビール、鳩にキャビアほか』(群馬県立近代美術館編、2004年)

『Koki Tanaka: Works 1997 - 2007』(Akio Nagasawa Publishing、2007年)

『The End of Summer: Koki Tanaka』(大和プレス・赤々舎、2008年)

ハ. 写真資料 および ホ. 予定される出展作品のイメージ

「練習問題」と協働に関するこれまでの作品



Relocate the Public Library in Taipei by borrowing one love story book at a time.
Leave the book in the Taipei Fine Arts Museum
2009
台北市立美術館



a haircut by 9 hairdressers at once
(second attempt)
HDビデオ(28分)
2010
Yerba Buena Center for the Arts



A Piano Played by Five Pianists at Once (First Attempt)
HDビデオ(57分)、ドローイング、壁
2012
ルーム・ギャラリー
カリフォルニア大学アーヴィング校

日本館展示構成のイメージ



会場は、建築関係者のグループに与えられた次のような「練習問題」に従い作られたブースによって構成されます。

「指定された素材(アルミシート、毛布、木材)のみを使って、個々の映像が持つ『練習問題』の内容や参加者にふさわしい専用のブースをデザインする」

これらのブースの中に、個々の「練習問題」に取り組むさまざまな人々の映像が設置され、日本館全体が経験共有のためのプラットフォームとなります。

建築関係者のグループによる協動作業の映像は、残材とともに1階ピロティ部分に展示されます。

参考:

“a whole museum could be used at once”

ヨコハマトリエンナーレ2011 横浜市美術館

会場構成のようす